

【授業科目】生理機能検査学Ⅱ Laboratory Clinical Physiology Ⅱ

担当教員	開講年次	選択必修	単位数	時間数	授業形態	実務経験	オフィスアワー	教職員への授業公開
榎本 喜彦	2年次前期	必修	2	30	講義	あり	巻末掲載	可
授業概要 (内容と進め方) 及び課題に対する フィードバック方法	<p>授業概要／生理機能検査学Ⅱでは、脳波検査、光トポグラフィー検査、消化管内視鏡検査、直腸肛門機能検査までを教授する。脳波検査にはPSGなどの睡眠時無呼吸検査、患者予後や意識レベル、脳死検査を含む。脳波検査では、測定装置の特徴や電子回路の特性および標的とする疾患の病態のほか、アーチファクトにより誤診に繋がる可能性についても教授する。この科目における検査には侵襲的検査を含み、患者接遇に細心の注意を要すること、および、手術室での業務に関連して行われる検査もあり、検査室以外での臨床検査技師の業務域についても教授する。なお、脳波検査を受ける患者では誘発検査による急変の可能性があり、その対応についても講義する。 *実務経験を持つ教員が授業を進める。 課題に対するフィードバック方法／2回行う中間試験への解答にコメントをつけて返却する。</p>							
授業の位置づけ	<p>本学のディプロマ・ポリシー①「臨床検査の専門性と責務を自覚するとともに、地域に住むあらゆる健康レベルの人々に専門的知識と技術に基づき臨床検査を実践できる。」の達成に寄与している。</p>							
到達目標 (履修者が到達すべき目標)	<p>①神経系の機能と性質を説明できる。 ②脳波の発生機序を説明できる。 ③正常脳波を説明できる。 ④異常脳波と疾患の関係、意識レベル変化や脳死と脳波の関係を説明できる。 ⑤消化管内視鏡検査、直腸肛門機能検査を説明できる。 ⑥患者接遇と急変時の対応法を説明できる。</p>							
時間外学習に必要な学修内容および学習上の助言	<p>第1回～第15回事前学習：事前に計画されている単元について予習を行っておく／範囲内の教科書は読んでおく／分からない用語については調べておく (各120分) 第1回～第15回事後学習：講義内容で不明な点は、講義終了直後もしくはオフィスアワーを利用して質問するなどして明確にするよう努める／復習のための課題を課すことがある (各120分)</p> <p>※上記時間については、指定された学習課題に要する標準的な時間を記載してあります。日々の自学自習全体としては、各授業に応じた時間 (2単位15回科目の場合：予習+復習4時間/1回) (1単位15回科目の場合：予習+復習1時間/1回) (1単位8回科目の場合：予習+復習4時間/1回) を取るよう努めてください。詳しくは教員の指導に従ってください。</p>							
授業計画	<p>第1回 大脳の構造と機能 第2回 神経細胞と興奮の伝導 第3回 脳波の発生機序 第4回 脳波計の構造 第5回 脳波の測定方法、患者接遇 第6回 脳波の基礎的要素 第7回 正常脳波 第8回 賦活法における基礎脳波の変化、中間試験 第9回 異常脳波① (賦活法、てんかん、意識障害、脳症)、患者急変への対応法、脳波のアーチファクト 第10回 異常脳波② (睡眠障害、ナルコレプシー、睡眠時無呼吸検査) 第11回 大脳誘発電位、手術室での誘発電位測定 第12回 脳磁図、光トポグラフィー、中間試験 第13回 脳波の判読と解説 (症例解析) 第14回 意識障害と脳死判定 第15回 消化管内視鏡検査、直腸肛門機能検査</p>						<p>全て榎本</p>	
評価方法 評価基準	<p>成績は以下の評点配分によって総合的に判断する。 2回の中間試験合計50%、学期末試験 50%、授業態度も加味する</p>							
教科書	<p>東條尚子、川良徳弘編 『臨床検査学講座 生理機能検査学』医歯薬出版株式会社 (1年後学期「生理機能検査学Ⅰ」で使用したものを使用)</p>			<p>参考書等</p>		<p>『病気がみえるvol.7 脳・神経』メディックメディア</p>		
学生へのメッセージ	<p>患者さんに直接接する検査である生理機能検査は、近年需要が増大している。生理機能検査学Ⅱは近頃マスコミにも人気の脳の領域です。かなり難しいところもあります。臨床現場の話も含めながら講義を進めていきます。積極的に学んでください。</p>							